平家物語考證

五

リ 5
814
5

門 り5
號 814
巻 5

帝國圖書館藏

平家物語考証目録巻五

ふやこうの事

彰部のさうぞく事

月見の事

物怪の事

大場りもやうの事

鈴敵を敵屋の事

かんやうこう乃事

文覚あらいの事

しうちん帳

文覺なぎされの事
伊豆へ流せんとする事
頼朝の事
西節乃さゝ
故のへりの事
奈良えんとゝの事

平家物語考證卷之五

松堂閑人四醉生　編
洛陽後學源道格　集
羽林中郎將藤原定俊　補

故うつるの事

二日北邸の別は行幸せらるゝ也とぞ記れゝ
治承四年六月二日或秘記云天曉如刻行幸於入
道相国福原別業法皇同以渡南城外ゝ行宮住
古陸奥之例延暦以後都を此儀議可謂希代ゝ
勝事乎敢無知由依ゝ人疑可被攻南都大庇於
元和年ゝ ゝ可有不意ゝ恐乎又餘黨於不休

如御祓被帰畏所云彼云是不可及洛中之恐事終或
説云有遷都之儀隆房卿比怨除幸如何事祈可謂物
性必有之徴兆又云面洛陽之半中有可亡刑之
左右之是儀紛紜巷説彼模猶素光賤以作天如
事只天魔謀滅朔家可歟之遷幸儀以足恐之偽説之
自八条西洞院武士数千騎二行至鳳凰天幸治先
入道相国等皇帝輿 次女車一両 次女房輿二 二京及摂政宮家
云云
次行幸鞦韆供奉人云云四人
左大将実定 別当時忠 宰相中将通親卿
近衛司 左中将泰親朝臣 右中将隆房朝臣
職事以前亮重衡朝臣 以参議隆房朝臣
隆房朝臣着打衣袴束 褐衣 布衣 白袴 袴 俗字 狩衣 菜脛中
打袴 螺鈿野 剱 有屈鞘
是域外之儀云云 左以不被甘心如此事可依附宜
事也 但左右随身打衣小袴烏帽云云
次摂政 乗車 前駆二人 殿上人二人 陪乗在車後
次内侍所
殿人左右各行隆 左右有房朝臣小侍也
各陪乗云云
次御竈神
上皇左右督実家 参右右兼忠各乗車 但参依
仍自至陸奥京云云

次侍従

公御　師大仙言隆季　　前大仙言邦綱

殿上人左少将通資朝臣　同時実朝臣

右中弁兼光朝臣已上可後行歟

中務權大輔俊家朝臣　右京權大夫信行朝臣

安藝守左經已上京出許云云或説左經可余福原云云

次出車二両

次前大將宗盛卿駕手輿

今夜能大物　明曉御福原

内裏　手中仙云北盛家

上皇　法皇云云別庄

法皇　手宰相教盛家

摂政　安嘉門別当安能房云云

集入堂衆以宿所如立避路云云

三日記云付使脇送於院女房及邦綱口云云　許○四日

記云今日以後点觸白地一条以下中於邦綱入云多条

入云云○六日記云邦綱以許使点物来云院白地云

侍宿所点侍条不可叶如只今一切堂衆所相為也

又同所焼自先今一面日云云以先脇可今中云云

又云十四日夜主上自於盛家遷御福原別云不上皇所也

別庄　脇徐云云　家主　北盛　叙正二位了奉為右大臣殿不可

説云云余全不思者物狂云云　不足論乱也如論云云

それ乃ち其後

補大納言平時忠ノ妻太宰帥藤原顕時ノ女

同しき宮の日記盛家に為たりとて正二位たるよし家後

代たる右大臣良通のつかぬ階とつゝきさせるよ

見千上

又福原一ぬ書るゝ事ハ四面ゐたゝ板にてはつあ記

ゝ面ゐ宮に板をゝ仏ゝ

此事無所考或秘記曰以平宰相教盛家為法皇之

宮居則此一節恐為虚談乎

かのとゝ乃年ゝ

補神代巻ヲ按ルニ何レノ年ニ葺不合尊崩

ソ神武天皇ノ寶祚ヲ継玉フト云コト考フベ

カラス神武天皇ノ本紀ヲ考ルニ十五ニノ太子

ニ立トアルトキハ是時葺不合尊ノ統御ト

見ヘタリ此ノ後甲寅歳始メテ東征ス是時

神武天皇四十五歳ナリシカレハ是ノ中間

二十年ノ間ニ尊崩ノ天皇位ヲ継ケルナル

ベシ○古事記云神倭伊波禮毗古命與其

伊呂元五瀬命ニ桂坐高千穂宮云々按ルニ

高千穂ハ宮崎郡ニ屬セルモノカ

五十九年とゝ

補按ルニ神武天皇己卯ノ年五十歳ナリ

神武天皇より崇神天皇まで十二代ハ大和の国に於て
都を立て治ましハ後よりつくれる
補日本紀綏靖天皇元年都葛城是謂高丘
宮安寧天皇二年遷都於片鹽是謂浮孔
宮懿德天皇二年遷都於軽地是謂曲峰宮
孝照天皇元年遷都於掖上是謂池心宮孝
安天皇二年遷都於室地是謂秋津嶋宮孝
靈天皇遷都於黒田是謂廬戸宮實孝安天皇百二年也
孝元天皇四年遷都於軽地是謂境原宮開
化天皇元年遷都於春日之地是謂率川宮崇
補天皇三年遷都於磯城是謂瑞籬宮垂仁
天皇二年更都於纒向是謂珠城宮景行天皇
四年更都於纒向是謂日代宮又五十八年幸
近江國志賀是謂高穴德宮
せいむ天皇元年よりし
補古事記ニ考ルニ近淡海ノ志賀高穴穂宮ニ
坐トアレハ景行天皇ノ所都ヲ改メズメ都スル
ナリ新ニ都ヲ立ルニハアラズ
ちうあい天皇二年よりし
補日本紀仲哀天皇二年興宮室于穴門而居
之是謂穴門豊浦宮穴門拾芥抄云弘仁九年
改是門國

ちくせんの宮ニ[illegible]
補日本紀神功皇后摂政元年十二月生誉田天皇
於筑紫故時人号其産處曰宇瀰也
[illegible]
補磐余大和ノ名所ナリ藻塩草十市郡云々処
留同シク大和ノ名所ニソ万葉集ニ天飛ヤ処留
ノ社ノト云是ナリ高津摂津国ノ名所ニソ和歌
ニ詠セリ今カウソト云是ナリ日本紀云神
功皇后三年都於磐余是謂若櫻宮古事
記云品陀和氣命坐輕島之明宮治天下也
日本紀云仁徳天皇元年都難波是謂高津
宮又云履中天皇元年即位於磐余稚櫻
宮及正天皇元年都於河内丹比是謂柴
籬宮古事記云男浅津間若子宿祢命
坐遠飛鳥宮治天下也飛鳥ノ飛鳥トハ
枕詞ナリ日本紀安康天皇三年十一月
雄略天皇命有司設壇於泊瀬朝倉即
天皇位遂定宮云々二十一年遷都ノ事
諸記ニ所見ナシ日本紀云継躰天皇五年
遷都山背筒城十二年遷都弟国又云宣
化天皇元年遷都于檜隈廬入野筒城ハ
今ノ綴喜ナリ弟国ハ今ノ乙訓ナリ檜隈

大和ノ名所ナリ ひのくの乃入陸の京のト
古歌ニ詠セル 是ナリ 日本紀云 孝德天皇
大化元年十二月 遷都難波長柄豊崎云々
又云 齊明天皇二年九月遂起宮室 天皇
乃遷号日後飛鳥岡本宮云々 又云 天智天
皇六年遷都于近江云々 大津宮古歌ニ多ク
詠セリ 又云 天武天皇元年九月自嶋宮移岡
本宮是歳営宮室於岡本宮即冬遷以居焉
是謂飛鳥浄御原宮云々 又云 持統天皇六
年四月鎮祭藤原宮地奉幣于四所大神
告以新宮云々 續日本紀元明天皇和銅元
年詔畧曰 方今平城之地四禽叶圖三山作
鎮亀筮並従宜建都城云々
補續日本紀 延暦三年相山背國乙訓
郡長國村地為遷都也
十年とのひ一宵ものがたり
補日本後紀 延暦十二年正月甲午遣
大納言藤原小黒麻呂 左大辨紀古佐
美等相山背國葛野郡宇太村之地
為遷都也 法門賢璟亦奉勅相之云々
此地の神を見んとて

補青龍白虎ハ四方列宿ノ名ナリ和銅ノ詔ニ四禽叶圖ト是ナリ又或説ニ云平安城ハ左ノ方ニ流水アリ是ヲ青龍ト名ツク（按ニ鴨川ヲ云ナルヘシ）前ノ方ニ澤田アリ是ヲ朱雀ト名ツク（鳥羽田ノ類ナルヘシ）右ノ方ニ大道アリ白虎ト名ツク（朱雀大路ヲ云カ北海ヲリ南海ニ達スルノ大道ナリ）後ノ方高山アリ玄武ト名ツク（此叡愛大子等ノ山ヲ云ナルヘシ）又吳子云龍頭者大山之端必左青龍右白虎前朱雀後玄武

かゝる大略如ようす

補日本後紀延暦十二年二月遣參議治部卿壹志濃王等告遷都於賀茂大神

名人暦十三年十一月廿一日ようす

補又云十三年十月丁卯此日遷郡ようす

土ようて八尺の人形を伏くアるようす

補大和本紀云延暦十三年二月都移西京

皇法不絶限造未代此京外不可移勅制

唯而以土造八尺人形永守王城去會東山

項埋給若有王城事時必可動揺云々是名

將軍塚又田邑傳記云弘仁二年五月晦葬

於山城國宇治郡栗栖村有勅調修甲曹

兵杖劔鉾弓箭糒監令合葬向城東立窆
之其後若可有國家之非常天下之災難者
作卿塚内宛如歩鼓或雷電云々按ニ今ニ
東山長樂寺ノ峯ニ將軍塚ト云傳フル地アリ又或ハ田村將軍ノ塚ヲ称スルカ一決シ
難キ事ナリ世ニ將軍塚ノ鳴動ト称スルハ地
動ナルヘシ又按ニ延喜神祇式ニ新宮ノ鎮祭
ニ太刀弓矢ヲ用フル事アリ此ノ如キ事ヲモ
附會セルカ

比京ヲ八幡安城トナリ云々

補日本後紀延暦十三年詔曰子来之民謳
歌之輩異口同辞号曰平安京

[illegible]

補尚侍藥子ノ乱第二卷ニ出タリ

五畿七道ハ多ク[illegible]

補定俊按ニ畿内五州ノ地河内和泉ハ狹少ニ
メ論スルニ足ラス昔シ難波ノ都アリトイヘモ
瀬海ノ地ニメ如怒湖暴濤ノ畏シアリ諸樂ノ
都トイヘモ炎旱ノ時ハ井泉枯涸ノ憂アリ
今ノ京都ハ右件ノ憂ナクメ東ニ湖水アツテ
東海北陸ノ漕運ヲ便リシ南ニ淀川アツテ
西海山陽等ノ漕運ヲ通ス物語ニ称スル所

此ノ如シ

今ハ辻ゝ切ゝ車ヲとめたやすら行通ふすら

按此段言舊都荒廢者實不然是時郡臣大半猶在舊都矣

補古ヘ大路ヲ十丈トシ小路ヲ四丈トスル車ノ行キチガフ為ノ十リ

新都の事

えんとのるてめこ

補上卿以下百錬抄ニ同シ奉行ノ辨左中辨經房ト左少辨行隆ト兩人十リ物語ニ

行隆ヲ前官トス誤シリ

一条すちゝ五条まてハそれまてハかりなり

同年六月十五日或秘記云已刻為衣隨身二人同相從先条内裏女房[之上侍]以[花人]兼時招汎条經房朝臣昨日可被召同ゝ三ヶ条ゑ子細事

一左京条里不足事

右南行及五条度行及河院西大路不足ゝ条ゝ何樣ニ七地被ゝ共若ゝ被縮宮城色

申云須依地形ゝ廣狹彼定條理ゝ進退不足ゝ条曉雖斗申如被注下云域行平安惟

殆て謂道理の欲隨に被縮言葉何雅しき方乱
若て被縮之言叶数尤て不議実允南小五
町東西四町如何
一右京平地不美事
右宮城西有小山隔仲山可被用之地隔山之条
如何かし平地不事山谷相交被用右京不可及
之雑記
申云如被作下之山谷相交高下不等之
事雅用京都之地允但北大山北原谷南
成切之盍用平地小又常時於不可及事之
妨之忽陵之之法何事之有乎如此事隨
仮宜所被相計允
一大嘗會事
右任式文今年可被行之変約日以前宜儀
若雅生来之於何変可被行幸遷都大嘗
会及芝其大宮也内裏被遂行之諸國煩
多氏力定被允何様可被進退哉
以前条々殊加斟酌可令斗言上給之依
彩院仰之条言上
經房恐惶謹言
申云謂大記謂遷於共是國家重事也
相並被行之國費多欲遷市舊都

被遂大嘗會之後一向為遷都之沙汰
匠作且先表神事之不輕欲遷都之煩
之故也但遷都事必可被忘行之又以勿
論陰陽延行大祀礼式以来曾无此例仍
新宮之造営係雖殊切之撰可備礼儀
之而之成不日之切可被果遂如之業不
可叶之彼陰陽之例延引之外如何
經房云外記勘申云七月以前即位之日
年被行大嘗會之例大岡弘仁是也云々
申云若是抵式以前事也不是由例之儀
又云於離宮被行大嘗會如何先例如何造営雖

叶仍當時御在所之所如何造加舎屋被行如何云々
申云於離宮被行大祀之条彼時有古昔之例等
雖遂行之　此外經房有語有之
次条新院依百条御前頂之退下召女房之此日時
忠々条上於御前百條房朝臣作下之改和田弁門
小屋野々為之地早速木　寮可打定之地和田之
京所数狹少雖儀万端衆人不甘心万民有苦色於小
屋野之頗之後堂之但意心業之不如之遷於女房之
語云遷都万人莫不歎息或之流涙之族云上皇
不被作是非云々又聞相少納言家綱被拷問之
申稟之事如之又行隆朱云都地改定小屋

野ヲ此旨ヲ申シ中務省ニ伝ヘ申セシム

行事官

補遷都行事所ノ官人ヲ云

たゝせんさくらし

補百練抄コレニ同シ但シ印南野

ハ水ナキニヨツテ罷ラル

いとゝよ三条ハ廣路をゝ

補文選西都賦ニ出タリ三条ノ廣路ヲヒラ

イテ十二ノ洞門ヲ立タリトハ宮城ノ制ニメ都

城ノ制ニアラス十二門ノ名拾芥抄ニ出タリ縱

横ヲ〳〵三条ノ廣路ヲリ又通親ノ持議ニヨ

ツテ先ツ里内ヲ造ルト云コト諸記ニ所見ナシ

五条ハ大納言ほうのつゝ

補百練抄ヲ按ルニ今年十二月十一日遷幸

福原新造内裏入道大相國所造進也云々國

綱内裏造進ノ事所見ナシ

いまゝのゝこゝ

補日本紀仁徳天皇元年都難波是謂高

津宮即宮垣室屋冊堅魚也捕梁柱楹冊

藻飾也第茨之蓋冊剖齊也云々

ふり乃ゝ

補同四年詔曰朕登高臺以遠望之烟

氣不起於城中以爲百姓既貧而家無
炊者云々又詔曰自今之後至ヲ三載悉除
課役息百姓之苦云々
そしやく免の事ゝ
補吳越春秋曰楚靈王立建章華之臺
云々仲擧曰今君爲此臺七年國人怨焉財
用盡焉年穀敗焉百姓煩焉
あたらおこしてゝ
補史記秦本紀曰二世皇帝元年四月役作
阿房宮云〻七月戍卒陳勝等反故地
たうしらるゝ

補淮南子云堯之有天下也茅茨而不剪
採椽而不斲大略不盡云々
たうのたゝぶ乃ゝ
補通鑑綱目ヲ按ルニ唐太宗九成宮
ニ幸シ馬周諫メ飛山宮ヲ作テ魏徵
諫ム又大明一統志ニ楊大年カ談苑
ヲ引テ云驪山絶頂有翠微寺本唐
武德初之太和宮也貞觀勅名翠微宮
太宗嘗避暑其上又ヲ此地上仙云々
物語ニ民ノ費ヲ憚テ驪山ニ幸セサ
ルコトヲ云飛山宮ヲ誤レル者カ

用ゐる事

六月九日の日新都の事てしめす

補陵ルニ百練抄ニ依ルトキハ六月九日ハ點地　初テリ秘記等ニ依ルトキハ十五日ニ至テ點地ノ議ナリ一決セスト見ヘタリ十一月十三日ヲ遷幸ト又百練抄十一日ニ作ル

人〻名所乃月をゝんとてゝ

補須磨ハ摂津明石ハ播磨淡路迫門ハ淡路繪嶋モ同シク淡路ナリ白良吹上若浦ミナ紀伊ナリ住吉難波ハ摂津ナリ高砂ハ所ミ十月ノ名所ナリ

近衛かゝ乃大臣ゝ

皇太后宮多子大炊御門右大臣公能女宇治左大臣養為子即第一卷所稱二代后是也

補近衛院ノ后是時太皇大后ト号ス寛定ノ妹ナリ

源氏のうち乃花ゝハらてゝくの宮ゝ乃むめ秋の名所をわけ給ひしを思ひてゝ

しまゝ

源氏物語花あるゝよろふへらゆゝすいゝい乃ゝをす

こゝをしあきらこんこま（を月ちらしきほとゝぎすあるれる
をなりめてたゝれをしらくお紀なけて　人〳〵みるりす
のこゝいとさむけよ分ゝそくるゝ（をめりわふひとりおな
しこゝなるあとれるとみるらちるゝひとりをそら
ますこゝねくきてびたをまゝ（をを紀てをちをてまさ
くらふしてみるらしきこゝをたをを月のまをたいと
あくさゝ出れ八扇をあるてれてを月いま移らつゝ
りくりもとてさゝのをそをあ和いらくらゝけよ白ひ
やるゝゝをひふりゝ（ハてのゝくゝまゝふきををて
いる月を思をちをゝりあゝりれを海と思をゝひ
於ゝ八ゝるとをゝちあゝひゝるををひみゝををこををり

ちふすしつきこゝちをよハすしとも流れ月まをたる物ふるを
をゝ形よゝをゝゝちとけの移りをゝゝゝをはををひとを
さゝに紙をまひやをゝ（ハまをいとゝのゝれまあゝゝゝ
おゝゝ

まつよひ八ふ後

補紀氏石清水別當成清ヵ女第十リ

物ゝこの花人

今徳大寺家有稱物加波諸大夫者即其
裔也

補藤原経尹南家十リ系圖云皇后宮
大進懐経子号物加者云々或説ニ物加

者ト稱セシ前ハ上壇ト称セシトヲ
ヒ川けの事
此段總無所見

ゐんきのこと
補変化ノ者トハ妖魅ノ其ノ未形ヲ改
メテ他ノ形ヲ為スナリ俗ニ狐狸ノ形ヲ婦
人小兒ニ変スルナトヲ類ナルヘシ一舎ニ満
ル人而又ハ髑髏ノ自然ニ生ノ堆積セ
ル事天地ノ間法ノ無キ事ナリ物語ノ
作者矢草ヲ記スルカ為メノ張本ナルヘシ
ちやうこいすあること

補清盛早晨ニ卧内ヨリ出テ寢
殿ノ妻戸ヲ開キ前庭ヲ見ルノ
義ナリ寢殿ノ母屋ニ帳ヲ置キ
衾枕ヲ具フル裝束抄等ニ詳ナ
リ

つゝの内
補寢殿階下ノ地ナリ泉石ノ所ニハア
ラズ梅壺梨壺ナトヲカ如シ
くろさるのひしらい
補甫雅ニ的額トヲ是ナリ又望月ハ牧
ノ名好馬ヲ出ス所ナリ牧ノ名ヲ以テ

命セラルヽカ又的額ニ依テ形容セルモノカ

むかし天智天皇元年夏四月鼠産於馬尾釋道顯占曰北國之人將附南國蓋高麗破而屬日本乎云々

源平盛衰記いのこれもとゆめとかのつかれたる事ならんなりけり

按此事有恥相類者壽永中齊院次官親能以與頼朝匿雅頼家因使廳索捜於雅頼家恐以此而附會者乎

節カ

有秘說

補軍防令云凡大將出征皆授節刀義解云凡節者以髦牛尾為之使者所權也今以刀劔代之故曰節刀云々又節刀ノ義禁秘御抄ニ出タリ

大夏の西の事

同書曰天平元年十月十日大夏の三郎京都ニ

京ヘ上るを聞て十七日云々

或秘記可考 九月十一日之記見于下 又詳見于東鑑治承四年四月九日廿七日六月十九日廿四日七月十日八月二日廿六日九日十日十七日廿日廿二日廿三日廿四日廿五日廿

六日等之記

補鎮守府將軍平忠通裔平太景義子

たや子

補急速大事馳驛申奏スト云是ナリ公式令等ニ詳ナリ伊豆ノ國衙ヨリ進奏セズメ景親ヨリ愛ヲ告ル所以ハ清盛私ニ景親等ヲ遣メ仲綱等ガ遺孽ヲ捕ヘシムソノウヘ目代スデニ戮没ス故ニ景親ヨリメ告報セルナリ

小系の罪ヲ改

補肥前守平維將裔四郎時家子

伊豆北条の目代

補東鑑ニ散位平兼隆ニ作ル伊豆國ノ流人トス目代ノ事ナシ然レトモ秘記ヲ陵礫所司先使ノ文ナリ目代ニテモアルヘキカ

七肥七屋太郎記

補土肥二郎實平ハ笠間押領使平常宗孫土屋三郎宗遠ハ實平カ弟岡崎忠四郎義實ハ莊司平義継カ子

畠山

補莊司平重能カ子重忠

こうられ大炊

補岡崎四郎義實カ兄義明○按ニ大炊ト稱スルコト兩義アリ 新任ノ國司大炊ト稱スル事朝野群載ニ出タリ見任ノ國司大炊ト稱スル事本朝文粹ニ出タリ朝野群載ニ出ル者ハ曾任ノ守イマダ國ニアルカ故ニ遁避ヲ大炊ト稱スルカ又本朝文粹ニ出ル者ハ任限已ニ滿ルヲ以テ新司ヲ避ル故ニ大炊ト称スルカ総テ公事ニ推シマカセテ用フヘキ事ニハアラス唐名ヲ用フル類ヒナルヘシ次郎義澄ハ頼朝將軍ニ任セラル、時同炊ノ除書ヲ賜フ父義明ニ曾テ相模炊タルヲ以テ父子同官ヲハカンタメニ義明ヲ大炊ト称スルナルヘシ例ハ子葉胤正ヲ新炊ト称スルカ如シ守ノ別名ニテハアルヘカラス

河うへ

補太郎平重頼畠山重忠カ再從兄弟ナリ

稲毛

補三郎平重成畠山重能カ從弟ナリ

小山田

補五郎平行平上ニ同シ

江戸

補太郎平重長上ニ同シ

葛西

補平武常狭父将恒ガ子

てうてはそろへの事

小心田は別当ゑちげ

補畠山重能カ叔父ナリ　別當ハ莊園私官

名

うたの家はたゝ情つとも つゑ

補栗田関白道兼裔守都宮座主宗圓孫

昔日ていうきみとのたゝ

補神日本磐余彦尊ナリ日本紀神武天
皇己未年春二月高尾張邑有土蜘蛛其
為人也身短而手足長与侏儒相類皇
軍結葛網而掩襲殺也云

大石の山丸

補按ニ日本紀雄略天皇十三年播磨国人
文石小麻呂ト云者伏誅ノ事アリ疑ラクハ
是ノ事ヲ謬レルカ

大山の子

補大山守皇子ヲ云カ紹運録應神天皇第
二子又日本紀ヲ按スルニ應神天皇晏駕

ノ後太子ニ於テ不利ヲ謀ル太子誘ヲ溺
殺ス

山田乃石川

非朝敵事見孝徳天皇紀

補日本紀ニ考ニ蘇我倉山田石川麻呂
孝徳天皇ノ朝ニ右大臣タリ譖ヲ被テ自
殺ス

もりやの大臣

非朝敵事見陽明天皇紀

補日本紀ニ按ルニ大連物部守屋ハ用明
天皇崩殖ノ後欽明天皇ノ子穴穂部皇
子ヲ援立テ蘇我馬子諸皇子ヲ誘テ穴穂
部及守屋ヲ殺シ泊瀬部皇子ヲ立崇峻天
皇是ナリ

勇敢入麻

事見齊明紀

補蘇我入鹿皇極天皇四年伏誅ス逆賊ナ
リ事八日本紀ニ詳ナリ

大友皇子

補日本紀ヲ按ニ仁賢天皇十一年帝崩ノ
太子イマタ立ス大臣平群真鳥窺覦ノ志
アリ大伴金村連太子ニ告ノ真鳥ヲ誅セシ

文室の姓四

以下至藤原仲成見續日本紀皆非朝敵矣

惟惠義押勝實為朝敵

補仁明天皇承和十年散位從五位上文室宮田麻呂謀反配流於伊豆國云々續日本後紀ニ詳ナリ

さいかいせい

補承和九年春宮坊帯刀伴健岑但馬權守橘逸勢謀反逸勢流於伊豆國健岑隱岐國云々續日本後紀ニ詳ナリ

ひらみのにわつき

補續日本紀桓武天皇延曆元年ニ詳ナリ

謀叛ニヨツテ伊豆國三嶋ニ窺セラル

ふじわらのなりなを

補續日本紀廢帝天平寶子八年ニ詳ナリ道鏡カ寵ヲ嫉テ叛ヲ及ヒ伏誅ス

さいかいのみこ

補早良太子桓武天皇同母弟ナリ延曆四年藤原種継ヲ殺スノ故ヲ以テ淡路ニ流サル

井上内親皇后

補續日本紀ヲ按ルニ皇后ノ所生他ア
親王ノ儲位ヲ失セルヲ怨ヲ厭禳ス左
道ヲ以テ罪セラル光仁帝ノ后ナリ

いよのちんたう

補平城天皇大同二年中路卿伊豫親
王潛謀不軌幽於川原寺仰藥而死云々
日本紀略等ニ詳

藤原ひろつぐ

補式部卿宇合ノ子續日本紀ニ詳ナリ

藤原仲成

補宇合ノ孫田麿ノ事事蹟前ニ見タリ

平將門藤原純友

見テ第一卷

あべのさだとう

補今昔物語ヲ按ルニ安陪頼良ト云者
アリ父ヲ忽良ト云父祖相繼テ酋ノ長
ナリ頼良後ニ名ヲ頼時ト改ム負任宗
任ハ頼時カ子ナリ征戰ノ事跡今昔物
語ニ詳ナリ

おくのくにのかみ

補前ニ詳ナリ

宮治太府

按法性寺関白通憲入道可為朝敵乎否
補頼長知足院関白忠實子系圖云依被
申行乱逆世人号悪左府
悪左府のこと
補信頼前ニ詳ナリ
かうへをごく門みなをしろ
補中右記ヲ按ルニ平師妙梟頭於西獄門
前樹上云々
昔ハせんへをむら刈てなけ
補宣制ニヨツテ枯木花ヲ發シ實ヲ結フ
事本朝ノ故事イマタ考ヘズ羯報録ニ
唐玄宗碧鼓ヲ擊テ春光好ノ曲ヲ奏セ
ラレシカハ柳杏奏折セリ玄宗指笑ヲ此
事不喚我作天公可手ト云コト見タリカ
クノ如キ事ヲ誤レルモノカ又飛禽ノ服
從スルコトハ下ノ鷺ノ故事ナルヘシ
延喜の帝ホせんゑんへ行幸ありて
補勅宣ニヨツテ飛鳥ヲ捕フルコト神泉苑ノ
故事所考ナシ姓氏録云垂仁天皇々子誉津
別命年向三十不言語ヲ時見飛鵠問曰此何
物爰天皇悦之遣天湯河桁尋求詣出雲國
宇夜江捕貢之天皇大喜即賜姓鳥取連云々

又鵠鶴ヲゴイサギト訓ス頭ニ赤毛冠アルヲ以テ五位鷺ト称スルカ賜緋ノ詔ニヨツテ始テ称スルニハアルマジ續日本後紀仁明天皇承和十四年十月辛亥授双丘東墳従五位下云々天皇遊獵之時駐蹕於墳上以為四望地故有此恩又曰壬子双岡下有大池池中水鳥成群車駕臨幸放鴻雁拂之云々堙ルニ彼此ニ依テ附會ノ説ヲナスナルヘシ

見千史記

又いとくるまの事

補史記ヲ考ルニ太子丹ハ燕王喜ノ子ナリ秦ニ質タリ秦王遇スルニ禮ナシ故ニ帰ラントコトヲ請フ烏白頭馬生角ノ事燕丹子ニ出タリ機發ノ橋ヲ作ルニ機發セスト云リ亀ノ助ヲ得ルコトハ晋ノ毛寶カ故事ナリ荆軻田光等ハ史記刺客傳ニ出タリ荆軻カ田光ヲ薦ムルニアラス田光カ荆軻ヲ薦ムルナリ秦舞陽ハ燕ノ國ノ勇士ニシテ年十三ト刺客傳ニ出タリ白虹貫日太子畏之ト魯仲連ノ傳ニ出タリ咸陽宮阿房宮史記ニ因テ記セリ長生

殿ハ唐ノ驪山ノ宮ノ名不老門ハ漢ノ洛陽ノ門
ノ名ナリ始皇琴ヲ鼓セシムルコト史記正義ニ
出タリ

補遺所ニ頼朝ニ比シ始皇ヲ清盛ニ比スルナル
べし
もんくのあるべき事

元年二月九日一身假形於商人赴東國方
之處於不破関々河原為頼盛卿并彌平
次郎棟清被囚虜上洛出六波羅畢其後
爲清盛継母池尼公偏可被原免刑戮之
由頻懇申之々依之被減一等被定流刑
畢同三月廿日進発配伊豆國比留嶋
たゞおのゝ[illegible]

補元亨釋書ニ傳ヲ載タリ
わゝあへの[illegible]

藤氏ニメ遠江ノ受領タルモノカ又渡邉黨ナル

トキハ嵯峨源氏ナルベシ又盛衰記ニ文覚在
俗ノ時渡カ妻ヲ害ノ佛法ニ原ツクトイヘリ
今ニ鳥羽ノ卿ニ懲塚トテ渡カ妻ノ首ヲ埋
シシ塚ナリトテ其傍ニ僧源空ノ追薦ノタ
メニ書スヘキ所ノ六字名号ノ碑アリ然トモ其
未由詳ナラマ

志ゆしとふハ

補佛家ニ所謂苦行練修ノ法ナリ遺教
經ニ特戒苦行云々又梵網經云不燒身臂
指供養諸佛非出家菩薩云々皆ニシテ法ヲ
信ズルカタメニ身體ヲ愛重セザルヲ云也

補拾玖抄云那智如意輪堂云々古歌ニ
モ多ク那智ゴモリヲ詠セリ

那智瀧

廣幅十三歩懸流七十餘歩常籠雲霧不得
見其絶頂又有觀瀧臺者去瀧六十歩人登
此臺則濺沫猶沾衣文覚潛處于此潭底者
未可信或曰別有淺流即文覚所潛處矣真
偽都不可知

慈救三洛又

不動真言也以一萬遍為一洛又

八人ゆとりしてう

補大日ニ於テハ四佛四菩薩ト称シ不動ニ

於テハ八大童子ト称ス別名同躰ナリ

大聖不動明王ハ[illegible]

補不動明王矜羯羅制吒迦ヲ説底哩三昧

耶経ニ出タリ

大峯

補大峯ト金峯山トハ一ナリ大峯ハ総名ニシテ

種々ノ別名アリ拾玉集永心をすまぬみなかハ

けたえて大ミ祢まてもあるへしその儀

りつらも

補延喜神名帳ニ葛木一言主神社捜ニ葛

木山ハ役小角経歴ノ地ナリ今修験道ニ葛

木ノ行者ハ中絶スト云々

吉野

洞院家伊呂波字類抄云弘仁七年建之弘法大

師御入定地也号金剛峯寺是也件處委注仍

略之

又云本朝文集云金剛峯者弘法大師御建立

紀伊国伊都郡正南弁生大明神御領山他密教

相應之處修禅入定之御也仰弘法大師者是

讃岐國多度郡扇凡浦人也父者佐伯氏昔征敵
毛彼班土多母者阿刀氏夢見天空聖人来入胎
中懐妊宝亀五年甲寅誕生也　五六歳之間以泥
土作佛像以草木建立堂自夢見坐八葉蓮花之
中諸佛共語雖然不語父母何況他人乎父母崇之
号貴物云々　大師告諸弟子等曰吾有却世之思
明年三月之中也金剛峯寺付奠然大德伴寺創
造未畢但大德自力不厚實恵大德可功加云々
吾初思也一百歳之間住世流布察教汲刹蒼
生雖然禅師等所持至薄也吾願又足也仁等當
知吾忌余於小波中尋法於十里外絶所傳道教護

之安鎮國家撫育萬民云々承和二年二月十五日
又云五臈入定来廿一日寅尅自今以後不用人食
仁仁行況等莫悲位人勿看素服吾入定之間往知足大
而叅仕慈尊御前五十六臆餘之間往知足後慈尊
下生之時必隨後而可見吾舊跡此峯冥者吉
佛舊基召集両部諸尊所安置也見跡必知其躰威
聞音則尋彼慈瞋者也吾末世資十萬親雖不知
吾顔見一門長者及此峯寄宿者可必察吾法擬
陵遊尅吾心穴緇徒禅僧之中與此法非我抵其
弘法計耳則承和二年乙卯三月廿一日寅時結
跏坐給大日定即奄然入定兼日十日四時行法

其間御弟子等共唱弥勒宣号唯以閉目无言語
為入定自余如身干時生年六十二夏臘四十一雖
如世人不喪送而嚴然安置則准世法及七々御
忌弟子併以并見顔色不裹鬢髮更長曰之剃除
恕衣裳置石壇例人可出入之許云々

粉河

本朝文集紀伊國那賀郡粉河寺千手観音者靈
驗無比勝利有聞故老傳云同郡有一猟師名曰
大伴孔子畋猟為業山林為棲即點幽谷点踞水
時々為生計夜之窺猪鹿干時當干左眼近有光
明其光赫奕如大笠心懐奇特漸行其所隨行
弓光去帰来然如木屋見此事及三四夜即艾穷
荆棘結搆草廬爰心中至心敬造寺作佛之
願不經幾裡有一童男行者暫成寄宿之語
孔子許諾行者喜悦語家主孔子曰檀越生
前願作何善根若有所願者吾當助成答曰
吾有一願草堂中欲造御像而無佛工未遂其
願行者曰我是佛工當遂汝願猟師云吾為法
男衆生兼然吾息男船主任奥州軍曹為其
帰御安穏願造佛像也者行者隨喜相共行
向彼草廬爰行者示云我七日内可作佛像
其中間勿来見若造願畢者吾往汝宅可見

新佛而佛上閉戸檀越帰宅其第八日曉忽有
扣戸聲往見草堂千手観音像見以出現更
無佛工於是悲喜両端涕涙数行不絶云々

金峯山

四辺九大長戒云曰金峯山金剛蔵菩薩
出世の弥勒菩薩（弥勒の金剛蔵菩薩）
又弥勒八一生補処の菩薩大迦大師の付嘱
をうけて第十職初の菩薩なり下生して三会の説法
（釈迦）の当来導師となる

白山

見千前

立山

伊呂波字類抄云頭給本縁起越中守佐伯
有名之宿祢仲春上之比為鷹猟之登雪
高山之間鷹飛空失畢為尋求之深山
次熊見射致然間笑立乍登於高山笑立
熊金色河於陀如来也躰厳石之山躰名
一峯腰号二峯肩字三峯頸名四峯申頭
為恵五峯時有若覆菩薩提心切弓切髪
成沙弥法号慈興其師茉勢聖人自大河
南者茉勢之建立三所上木宮中光明山下
報恩寺慈興聖人建立者自天河北三所

上葦叶寺根中宮横安安正寺又高禅寺又
工嚴山之頂禅光寺十柿也
下岩峅寺今泉也鷲巖殿温岐蓮臺聖人
建立圓城寺昭蓮聖人建立件寺一王子真高
権現依之康和元年造草堂中宮坐主永源
與所司等徳満聖人相語建立爲瑟之峯坤
方一有隈見顕現八大地獄惣一百三十六義
句

冨士山

補延喜神名帳云冨士郡浅間神社云々按ニ
冨士山モ同ニク役小角經歴ノ地十り

伊豆箱根

補按ニ伊豆権現祭ル所忍徳耳尊箱根権現
祭ル所彦火々出見尊

信濃の戸隠

補拾玖抄云影光寺古佛遊行所云々戸隠
明神祭ル所手力雄命

出羽のくろ

補按ニ羽黒山出羽國最上郡羽黒権現祭ル
所倉稲魂神木堂十一面観音云々

くゝ乞帳

神護寺

伊呂波字類抄云高雄寺元者号神願寺其
後弘法大師改神護寺當寺者應神天皇御
願寺云々惹廢中絶之後和氣清麻呂八幡大
菩薩有示事興隆又經年序之後為弘法大
師誓跡傳置有行幸之由見國史
見ハむりせ〳〵と〳〵ゑ皇云〳〵
補類聚國史ヲ按ニ景雲中和氣清麻呂八
幡大神ノ託宣ニ依テ延暦年中ニ建立スル
所ノ寺ナリ初メ神願寺ト称ス天長年中
改メテ神護寺トス
ゆきの清丸

補和氣氏系圖云垂仁天皇ノ裔平麿ノ
子
勅進帳をひろをてゝ〳〵
補募縁 簿書ナリ 揭護スル所ハ簿書ノ
序引ナンベシ
仏原
補釋氏要覽此譯云息慈云々
真如廣大云〳〵
補真如ノ說起信論等ニ詳ナリ生佛ハ最生
ト佛ヲ云立ノ字盛衰記断ニ作ル謂ハ本
然ノ理ノ一ニメ聖凡ノ名モナキナリ

法性隨妄雲ヲ

補真如ノ自性ヲ等ラスノ一念ノ妄相ニ隨フヲ云

十二因緣之峯ヲ

補十二因緣ノ說四教儀等ノ書ニ詳ナリ

謂一念ノ無明ヲ本トノ形アリ形アレハ愛アリマスヽ無明ヲ薰成ノ生々相續ヤムコトナキナリ

本有心蓮

補大日經疏ニ出タリ考ヘシ

三毒四慢

補三毒ハ貪瞋癡ヲ云法界次第ニ詳ナリ

四慢ハ涅槃經ニ七慢ニ作ル成論ノ大慢ヲ加ヘテ八慢トス

佛日早沒

補法數等ノ書ニ佛前佛後等ニ以テハ難トス

狂象重淵

補重淵ヲ盛衰記ニ跳猿ニ作ル跳ヲ踔ニ作ルヘシ狂象踔猿トモニ遺教經ニ出タリ

三逆四生

補法數等ニ詳ナリ三途ハ火血カヲ云四生ハ胎卵濕化ヲ云

無二顯章

補法華經ニ唯有一乘法無二亦無三云々

聚沙爲佛塔

補法華經方便品ニ出タリ

治承三年三月日

補百練抄ヲ考ルニ承安三年四月廿九日高尾上人文覺賜換非違使依狂氣也五月十六日被流伊豆國云々　物語ノ年月大ニ相違ナリ

文覺ありしあらまし事

補宇多源氏宮内卿有賢ノ子

補和琴ハ六絃ナリユトサキトニ物ヲ以テ撥鳴ス左手ノ五指ヲ以テ按ノ調ニ合ス

補凡俗ノ歌ヲ云拾玖抄ニ出タリ

補催馬樂ノ歌ヲ云今マ集一卷アリ音節抑揚ノ詳ナル其傳中絶スト云

てうしゝ〳〵

補尤ノ宮商角徵羽夏徵変宮ノ七音ヲ備フルヲ調ト云黄鐘商仲呂羽ト云コレナリ今マ伶官ノ所謂ル一起平調双調等ハ調子ノ名ナリ律ノ名ニハ又燕樂調ノ説事林廣記ニ見ヘタリ

さけ〳〵判官

補盥衰記ニ平州官ニ作ル

袁氏志

補系圖ヲ按ルニ安藤ハ魚名ノ末流ナリ

たゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵

補按ルニ右宗刀斎ヲ以テ文覚カ右手ヲ切ツハタラク所ハ左手ナリ手ヲチイマタ考ヘズ然トモ手水ヤウトニコトイフヲ手ヤウトヲノトヲチヤウツトヲ斧ヲ手ヤウヲノトヲヒヲ手ヒテ物ヲ掬スルヲ手ヒト云フ是時文覚ガ手ヲ拷ケスルヲ桶ノ賤悪ノ餘リ俗語ニ隨テ手ヤウヲ拷ストヲ云ナルベキ

三りいがみをくゝく

補法華經譬喻品ニ出タリ

法皮

補放免ニ作ルベシ検非違使廳ノ賤隷ニ
ヲ云放免トハ奴婢ノ補ヲ放免メ良民ノ
列ニ從フヲ云ヒリ

補和歌ニ詠スル所ノ安濃ノ湊ナルベシ
伊豆院宣乃事
此段全虚談也

天皇あらそ[illegible]
補前漢書韓信傳ヲ按ルニ蒯徹カ韓信
ニ說ク所ノ語ヒリ
三度たにとめらる[illegible]

補公卿補任ヲ按ルニ三官トハ參議皇太
后宮權大夫右兵衛督ヒリ光能解宮ノコ
ト治承三年十一月ニメ基房ト同時ヒリ
考証ニ此ノ段ヲ以テ全ク虚談ヒリトマ東
鑑ヲ按ルニ石橋山合戰ノ條下ニ以件令
旨被付御旗横上ニ々專ヲ以光ノ令旨ニ
依ヲ兵ヲ起スコト見ルベシ

富士川の事
去程ニ右兵衛の佐義むねのぶ[illegible]
うハ福原よハ[illegible]
さ小いそ[illegible]

乃維盛副将軍ヲハ薩摩守忠度朝臣ト上総守
知度ヲ先トシテ総合三万餘騎
治承四年九月一日或秘記云伊豆国住人源頼義
胡子年来在肥前国伊豆国ニ下ル日事出来悪
比陸奥所司之先使ハ伊豆国ニ下ル也 凡伊豆源氏
盛忠押領了又為義息一人年来徒結野盛
ニ去五月九逆ヲ刻起切東方ヲ以ヲ力被義
胡子大略企謀反欲宮ヲ將門ヲ凡去年十
一月以後天下不静兵乱偏以礼刑欲鎮海内
ヲ冒夷狄之教不怖威勢動起暴虐ヲ心
乃東又不ル錦好事欲依大礼ヲ国家ヲ安ル

仁王那意ヲ為ヤ乃刑戮猥ニ仁義永廢天
下ヲ以兵革ヲ為ル ○同九日記云関東
有反逆ヲ聞去ル日大内裏ヲ焼ル 大史ヲ依ル
院有評議ヲ遣討ヲ使ヲ宣下ス大乃禄
宮内維盛忠度知度ヲ東ヘ向ヲ
但雖賊徒五百騎許官兵二千餘騎ヲ及合
戦ヲ賊ヲ遁入山中ヲ中ノ日ノ始飛脚ヲ
東ヲ馳ヲ大乃軍ヲ奏ル若有後ヲ奏
ヲ去ル礼 ○同十一日記云大夫史隆職注
送宣旨ヲ

治承四年九月吉日 宣旨 左大乃左中弁

伊豆國流人源頼朝忽ち諸山黨砂房
陸奥國陳國ヲ経て元既他常篇室
令右近衛橘少乃 年維盛朝臣奉河内
国知度等追討被頼朝及ト乃家兼
又東海東山西道 堪武勇者可令脩
追討其中抜有殊功軍ニ加不次賞ト
傳聞ヲ曾ハ追討使仲綱基住関ヲ武士ト
大庭ニ京ニ京ヲ 当使仲綱基遣信濃州方ヲ
見移ル私所也
然ニ乃忽頼朝ニ逆ル出来仍合戦ニ日逐
籠頼朝ト於箱根上ニ 因茂被追落ル由風
聞数日生後上総国住人双八郎廣常並ニ利

太郎 故利仮ヲ ヲ以ト 依力ヲ外陳国有勢ニ ヲ以ト多
以ト力ヲ欲殺ス紀ト ニ夜光脇ニ
東事及大事ヲ仍實否雖知此事浮説偏
多欲又熊野堪増 代事忽逆ト尚範頼ト力
ニ云々○十三日記云筑前ト貞俊来ル罷
入東国追討使ニ中来ル二百ヲ殺ル云々仍
国已ニ力ヲ ○同十九日記云傳聞筑紫
又有叛逆ヲ追討使ニ ニ又熊野
事遁日賊盛能ト 未及ヲ出ル
補惟盛ナキニ 右少将ヲ以テ春宮權亮
ヲ兼ス 今年二月譲位ニ ヲ 權亮ヲ

罷ラル是時ハ少将惟盛ト云ベシ權亮所
兼ノ宮ニアラズ
九月十八日ヨリ新旅を立て明ル十九日ヨハ六ツ旅ヨ
つき給ひ同ジ廿日東国へ下ゆもの給ひ
き
同廿三日或秘記云惟盛朝臣已下追討宣旨
出賊使ハ入俗一昨日出福原此日宿小屋と日入坂東今日入本国
七八日ヨリ同ジ有初途但以一昨日出行者
日ヨリ故ニ
同十月一日記云傳ヲ去月海比熊野隠岐
ヨリ殺セオ憑党攻戦ヲ事死去多未後原
又近日国住人ヨリ中被ヲ去ル御禁ヲ百姓
合戦ニ死近日五ヨリ不ル莫不辛有以武門
乙下ヨリ世豈以ヲ此外ヲ或代ヲ云ヤ○同十
七日伊勢ヲ追討使ヲ被ル射薩
ニヲ後ヲ謬説ニ○九日伊勢坂東追
賊黨ヲ従勢及叛万追討使ヲ弱ヲ極ニ
誠我邦滅盡ヲ引也ヲ悲之
補出軍ノ日次物語ト百練抄秘記等相
違アリ
金ヲ
補覆輪類聚雑要抄伏輪ニ作ル

いらけ地

補類聚雜要抄 汰懸ニ作按ニ伏輪ハ金裝ナリ

せんそたいくの將軍さゝ盛ゝ

補按ルニ將門追討ノ時發遣ノ將軍ハ藏原忠文等ナリ貞盛ハ常陸椽ナリ秀御ハ下野押領使ナリ二人トモニ國兵ヲ率ヲ將門ヲ討ス京師ヨリ發遣スルニハアラズ

むりゝ給てうをれいゝをゝ

補軍防令云凡大將出征皆授節刀云々

内裏外裏

補按ルニ内辨外辨トハ辨ヲ辨ニ作ルベシ辨ハ警嚴ノ意ナリ三畧ニ軍幕未辨將不言僧ト是ナリ内辨トハ日月華門ノ中近衛ノ陣ヲ云外辨トハ承明門ノ外ヲ云諸衛警嚴ノ處ナリ内辨ニソ事ヲ行フハ第一ノ大臣ニソ當日ノ上卿ナリ自餘ノ王卿ハ外辨ニ止テ召ヲ待テ門ヲ入ルナリ延喜太政官ノ式ニ宴會ノ時大臣侍殿上行事トヲコレ内辨ノ義ナリ

大臣よせちゑ

補盛衰記中儀ニ作ル化ノ節會トハ
王臣會同ノ禮ナリ延喜式ヲ按ルニ節
會ニ大儀中儀小儀アリ初位以上預ル ヲ
大儀トスヒ六位以上預ル ヲ中儀トスヒ
大夫以上預ル ヲ小儀トスヒ延喜近衛式ヲ
考ルニ將軍賜節刀ハ小儀ナリ中儀ニア
ラス

承平天慶

補純友ガ亂ハ承平六年ニ起テ天慶四年
ニ亡フ將門ガ亂ハ天慶二年ニ起テ同三
年ニ亡ブ

ヒ[illegible]ハ[illegible]ヨリ[illegible]

補百練抄ヲ考ルニ天仁元年但馬守平正
盛隨身源義親前對馬守并郎從四人首
參絡云々中右記因幡守平正盛ニ作ル
[illegible]

補百練抄ノ文物語ニ同シ又中右記ヲ按
ルニ平正盛因幡守トシテ任國ニアリ其ノ
比近ナルヲ以テ命メ追討セシム京師ヨ
リ發遣セシムル ニ非ズ鈴ハカリヲ給ノ故
實正盛カ例ニテハアルマシ節刀ヲ賜ハラ
ザルノ例ナルベシ驛鈴ハ因幡ノ國衙

曽ヨリ給ヒ置ル所十リ

彼軍ハ二つの子ハ[illegible]

補尉繚子云将受命之日忘其家張軍

宿野忘其親援枹而鼓忘其身云々

十月十六日又ハ[illegible]の由[illegible]ハ[illegible]

此以下之事實實記所載悉録于此焉覧

者以之可考此書之實否

十一月一日或秘記云伊勢退討使徳盛朝臣

已下被遣向了已欲赴近江地ヘ百山伊勢

ヲ御ケ[illegible]仍更向伊勢ヘ[illegible]元逆黨

ヘ[illegible]勢不知幾万騎東山東海ヘ[illegible]以

[illegible]力官軍之勢本五十餘騎被遣[illegible]ヘ百騎

不過三四百騎ヘ[illegible]元不能左右[illegible]以来

追討使空被遣返ヘ例未曾聞今古

之不及聞故依一人悪逆上皇令德ヘ[illegible]

殊欲々悪事也仙ヲ定有冥助歟又ハ[illegible]

野法橋[illegible]勝ヘ法西法[illegible]ヘ云又以不

能征伐積悪ヘ不[illegible]因果聞玉歟々[illegible]

ヘ福士只不作ヘ[illegible]ヘ[illegible]

同四日記云伊勢退討使又向伊勢只忠清許

赴伊勢ヲ他人百々入京ヘ又伊勢退討使ハ

今日入晩景入京知度去入僅北金孫維盛
迎入又不過十孫云云先去月十六日義隆河
田高橋宿之見後面目代及有勢武勇之
士之千余孫寄甲斐武田城之百騎悉被
伐取了因代以下八十余人切頭德路既
云云 同十七日銘自武甲方以使去相副 消息 逆
維盛館之牒云年来雖有見參之志干今未
遂之思幸如宣旨使有此下向雖須参上旨
之綸一日治承 転 頼朝参又源氏有類仍如深
孫 京甲斐 之孫河云云 相互仍向領逐見参云云
忠信見云大思使去二人切頭了同十八日富

士川遠攻繼至 明焼 十九日 富攻之支度
世間云云計宜軍勢云云処度是去秋四千
餘騎作手定陣議了各休息之間宜兵之
方数万孫忽以降伏向敵軍城了勢力干
物自不拭之勢僅不及一二千孫武田方四
千餘騎之依不而及敵對窮以引退是別忠
清之謀畧也如彼盛之敵勢々引退之心云
云忠清五次郎之阿丹之数洲士卒之輩
多以同之仍不能點止自此主路以来軍兵
之意力保以喜抜適而拭之案已逐電
凡事之次第非道也事云云今日為勢多

以使者示之細かに諭つて大忽之兼
追討使に日を合かるに所維嶽殿かに敵軍
豈可恥小事乎厳追討使に勇士使を以て
若入京洛誰人で全眼却不受し恥敗家尾
籠し名当世致早自路一晴証必更不で入京
こと然而竊入洛寄宿搶逃使忠綱に宅を
お知度を先以入洛左様つし八条家を大
器以伝説記に定有老偏欲仕先代軍陣
こと小事説やを細誰及殺亮を也
同十一月六日山槐記云或者追討使右かに
維盛朝臣今暁入舊都六波羅九月十八日著

強に出国十九日新蔵堂千不志河逆使
又知其状維盛朝臣同所に於忠京に日
兵法不斬使者然而此條私戦に対事也
今に追討使可及返答哉先問使方を細
で斬者維盛朝臣後此言令痛問使者云
軍兵有数万敢不可に敵対者国此後斬
首に或雖此事に官兵侍千余騎更不
で及令戦兼又法兵仕内心皆有新朝臣
兵牙恐異心暫逗留者欲圍塞後陣に
忠京に同此事を欲戦に心に間宿傍他
多数万俄先去 世に成雷官兵皆疑軍

兵之寄来夜中引退上下競走自焼宿之
座敗中於雑具焼忠度不知此事追退
但忠度向伊勢国京師維盛朝臣入京著近
州野路之時首五六十残之此事或威之
兵法引退随事雖之如之或又議之近日
門々戸々虚言甚多此事定少実尤於不聞
巷説随聞及粗注後日頼盛經房示送曰東
国追討事中納言知盛平宰相教盛等下向
之由随有風聞伊勢守清綱定安自海道
可下向之又謀西武士自船口之隆摩
守忠度朝臣参川守知度前守貞俊大将

尉忠綱当参河守右少将維盛朝臣在近江
国之由所聞也新都古都甚草
十五そくまおとつてひくにはえり
補古射法書云矢束に十五そくあと云事
かくせまひまふ事一向虚言ゝゝ

大名

補此ノ時ノ大名ト云ハ土豪ニノ名田ヲ多
ク兼併セルヲ大名ト云ヒサキヲ小名ト
云名田トハ所帯ノ田ニ名ヲ付テ某ノ名
ト云フ荘ヲ某ノ荘ト云ニ同ニ所帯ノ
主ヲ名主ト云此名今ニ残レリ

同じく廿四日の夜の別ふる

補水鳥ノ羽音ニ駭テ官軍ノ敗亡セルコト東鑑ニ廿日ノ夜ニ作ル山槐記十九日ノ夜ノ事トス

きるかのほをそろ

補東鑑ニ安田三郎義定ヲメ遠江國ヲ守護セシメ武田太郎信義ヲ駿河國ニ還ト云々

落書

補匿名書ヲ云本朝文粋ニ櫻嶋忠信カ落書ヲ載タリ

五節はさゝ事

同じき十一月八日は大將軍殿の佐(亮)の母盛福系

へ物のかり

見千上

多田の後は宗孝は五郎内一は故盗二人逃ぬ

をうく

補忠清か盗ヲ捕フルコト別ニ所考ナシ盛衰記ニモ是ノ事實ヲ載セズ然レトモ秘記等ニモ忠清ヲ殺メ第一ノ勇士トス又百練抄ヲ考ルニ治承三年十一月前越中守盛俊欝強盗トアリ

[illegible]
補公卿補任ヲ考ルニ惟盛治承五年六
月十日右近權中將ニ轉シ補藏人頭トア
リ
[illegible]
補忠文式部卿宇合裔參議枝良子云々
故事談云天慶三年二月八日天皇出御
南殿賜征夷大將軍右衛門督藤原忠文
節刀下遣於坂東國云々
[illegible]

漁舟火影寒燒浪驛路鈴聲夜過山
杜荀鶴秋夜宿臨江驛詩也
[illegible]
補故事談云忠文卿勸賞沙汰之
時小野官殿關白疑勿質依被定
申不被行云々其時九條殿刑疑ヲ
ハ勿質賞疑許セトコソ侍レド被
申ケレトモ遂不被行依長申此詞後日
奉冨家之奏云々又拾芥冨家
殿ノ條下云民部卿忠文家也小野

宮有故水泰云々　○按ニ忠文ニ童藤
ヲ相並テ称スルトキハ若クハ忠文ノ子
備後守滋望ヲ誤レル者カ
補將門ガ乱ハ天慶三年ニメ忠文ノ
卒ハ天暦元年十月乱後六年ヲ経テ
卒ス食ヲ絶テ死スルニアラズ
補貞信公忠平ノ長子實頼ヲ小野宮
ト称ス第三子師輔ヲ九條ト称ス小
野宮トハ所居モト惟喬親王ノ宅ナレ

ハナリ
同じきナリ入ラ[illegible]
補重衡ハ清盛第五子ナリ是ヨリ
先キ治承三年左近権中將ニ任ジ今
年正月藏人頭ニ補セラル
同月十五日[illegible]
補百練抄十一月ニ作ル
大嘗會[illegible]
大嘗會之儀見于三箇童事抄貞觀式延
喜式北山抄江家次第及諸實記可追注
補神祇令云ル天皇即位惣祭天神

地祇義解云謂即位之後仲冬乃祭
下條所謂大嘗毎世一年國司行事
是也

はけいろ

補延喜神祇式云凡天皇十月下旬臨
幸川上為禊

さいちやうぬをつくりてうゑ

補延喜神祇式云凡在京齋場者預
分設西處恐紀在左主基在右云々

神ふく神奥をそのふ

補貞観儀式延喜神祇式ニ詳ナリ

まさうひだう

補リウヒタウト称又泊宅編云唐含
元殿前龍尾首自平階地凡諸曲七
轉由丹鳳門北望宛如龍尾下垂於
地焉兩垠欄楯悉以青石為之故謂之
龍尾道云々本朝コレニ依テ太極殿ノ
前御ヲ龍尾道ト称ス

廻廊陰

補貞観儀式并延喜神祇式ニ詳ナリ

御湯ヲ供スル事仕象次第ニ出タリ

大ちやうくいし

補大嘗宮ナリ真書ノ物語宮ニ作ル
大嘗宮ヲ作ルコト貞観儀式并延喜
神祇式ニ詳ナリ
神せんをそなふる
補江家次第ニ見タリ按ニ祭ル所ノ神
祇ハ宸儀歴世ニ親ク示授ス或ハ摂政
ノ儀アルヲ以テ摂録ノ諸家孫子ニ秘
授ス他ノ人臣ノ知ル事ニアラズ
大こく殿すなはち大きたるなり
補已午日ノ節會大極殿ニテ行ハルノ
せいをよばうまたは神系なり

補清暑堂ハ豊樂院ノ後殿ナリ御
神樂江家次第ニ見ヘタリ
ふらく院まそのくらいなり
補豊樂院ニメ悠紀主基ノ節會アリ
彩ちやうを
補公事根源云用明天皇二年ヒロまる
彩嘗のるをたてまつる大くハ神代よりあるなり
五節
補公事根源云中比世のわをハ五節ハ

発試とて常寧殿にて上﨟所あること
百練抄ニ考ル ニ五節ハ新都ニテ行
ハル

うら舟の神さくらまてこと
補古ハ宸儀神嘉殿ニ幸ノ事ヲ行フ
神嘉殿ナキ時ハ神祇官ニノ事ヲ行
フ

於久万北事
さくらとよみをやこと大殿の入内ぞう
た旅らくりてしとて四ちさ十二月 二日北の
俄よ旅りへりあそう

續古事談云六條殿の大殿入内福原北条
をてこふくらうるそ なるれ ありにほとう
古家
をもむとそ古家よりいと所さんある人とを
みやひくらけるを人こそ入内のんをそれ
て公そりルいひふるうりりり長方ひと
つをとうしふをのみことの家を北しをてと
たしかまを蔵こいひりさてをとの家の
よ紀ををとくはるそのの日の殿人のさく
めよりて古家へき侍よなりふりう
ほふを左よるとう上達ア北長方ひあひ

ろくさてハあさましかりける京さはかりに恐人
ハいかにと思ひくらして古き京をさかりとまハいかにふ
いそぎたちいひをともむけて福原の偏あれた
こ物あれいふらひなくたうさちなきしいへし給
ハまし と云 られハ此る 我思ふハにさる儀なり
入道の心よりさりけんとてこそさハ云しかき故ハ
ひろく漢家本朝をかんかふるによる故新儀
をこなひひさしまるへき例ならはさりておりハあらく人
ないひあそきるへしその君かきもきこしくや
しむ心ある時人ハとふなり見し陸京ハ遷都
よみつきて後南京はさこめをはこなひしかハ

さやはるゝやしうありまたうりといふ事をあらりよ
きこされハなしかいてとふをおもしも人別と狭いたれる
清とにそほに人はきくらまんとしける時にこの
入道よらやしまやて長方ハその外に拙なく
つる人なり長やかなく人は親越さしむ亜なりまと
て侍るそれて人をせうきなりを梅小路中納言
此者京さうめとてその時の人の口にありけり

續古事談所載恐非長方之言矣按
長方治承中正直之士也嘗宥議明
雲之罪狀而不畏法皇之怒又義仲
欲挾法皇而降于平氏之日長方難

其議事遂罷以此觀之則豈希清盛
之旨謾事弁倭者哉若果信續古事
談所載則實好曲之士也蓋續古事談
欲称其才而妄害其人尤不足信矣
補百練抄云十一月廿三日俄自新都
可還幸舊都云々廿六日著御旧都
万民有悅色依東國逆乱忽有議
所帰都也主上入御五條皇居
新院いつくるくるの〻〻
補百練抄云七月廿九日新院御不豫
已累月天下政務一向不可聞食之曲

被御下云々
いそ記福原城いそ花於中条一院上皇
之由聞なす
法勝四年十一月山槐記云々右還御旧
都之由聞巷謳歌定記言歟○同廿四
日記云自福原行幸寺々邦綱卿家法
皇出御拙新院御所云々○
廿五日記云陰晴不定風烈今日出寺
江可為陰木陰云々而依風雨所止於
神崎云々後日新宰相中将通親云去儀
陰為陰木陰不可下侍○廿六日記云陰

時不定風烈今。出使木津殿行幸五條東洞
院亭新院御幸使車六使殿於盛〻家号池殿
法皇御幸出輿六使殿入道相国亭号泉殿去
六月二日俄遷御福原亭被奇置平安京依
天台衆徒訴申等東国逆乱俄又有還御也
各の宿所を忘れ人々八情驚怪彷徨ふ所也
山東山のうつろひつゝ

抜是時従福原之公卿不過五七人殿上
侍臣諸司属官或雖及数百人平安第舎
豈盡荒廃乎今言寓宿于寺社者乃文
詞之潤色矣

同じ比さいを紅原氏北条氏をせめんとて
左兵衛佐盛薩摩守忠度殿ゆくへ知らず
をくれの武人参向せり

治承四年十月廿日山槐記云今日於新
院御殿西面被議定東国逆乱事可既左
中弁任房朝臣奉行所日有古例未刻参
来常参入人〻又陪参入左大臣依仁王会
之由被示左大将実定直衣左五月於新院被
議国城寺乱逆事之由被
行仁王会左府如今被参来常而右府参直衣
左徳大寺実能右府被中左府今日大将兼帯
被宣旨隆季朝臣常中出大納言宗家卿来常左大臣参来常
也世外慮なき人〻右府被中不参之由申中

右府被中不参之由申中

他言雖所立福原皇大后大臣条々依擬按
条仁王會又此外之条大納言（実房）未詳左京大
夫（修範布衣）隆条々以前各退出天皇度々明雲
条々兆殊左依江州隆勢不審自去夜祇
候近臣之由被仰之趣正以顕条入道
俗使此日向園城寺去夜以条今日又依
左条入道及晩所参左大臣云東国武
業逆孔已及近江国有日心之間而又去夜
近江法師東国大津院以去了云々此日
事以被計行外各相議申者左大臣
日左大臣又被示所参左仰被示左大臣

去頭条進寄左条座下示云左大臣
云退討外不可有異議之上又被行法
自有仰伏之心又此法可有法行勝
于討甚多此為大概如此先中云被
参近討使之条理之可当也尤隆俊一
度玉同意之時答状的意已發白道江
玉方不過時刻可被参退討使以同方
玉只名同心不徒動宜先彼以後
皆雖仰被不可減於官軍之被左
集法玉軍兵之間係可加其力暫不参退
討使先参官使可被召同義起之由法先

若有中者徧不肯勅命之其所隨状
可被計行如速被責江州之条使國
以下加力可有技心尤可有思惠事
之御禊之法社法寺尤可被行之
兼又法宗被行大法之者中侍門
大納言被同子上侍行可被行仁王
經法毗沙門法之由被申云此
事可被行之次第可有侍行事由之
五三中入了之外之可申之事被行法
政事尤可如事之如而事已及火急隆
被行長改雖達被示之間如可給之

事一条兄將曹三兄可被計行如退計
条之武勇之輩左右之此上只左勅定
左大弁被申云先被退計退江之条不
可及奏議使宣旨被申云大畧同
法勝以下定功伝元左大臣被申云大畧同
左大弁被定申承平康和彼奉寄一郡如神
宮先例尤存尤可有之由法之名被申之
河内長隆詳不覺悟只注大概所令奏
侍者奏少弁朱作閑食了之由如左
大臣人々退出
同十二月一日 記云醫博士信康朱日

伊賀伊勢軍兵寄近江斬相木入道同
兄判官代山本兵衛尉三人首ヲ中
唯今姉刀来梟後斬首事元実ヲシ○同
二日記云今日大兵衛督知盛ヲ追討
使厳島ヲ近江国ヲ経河内ヲ打ヲ
京中在家諸別当宣立捕戎放遣置立ヲ
○同十三日記云後ヲ今日近江国山伝
刀寄兵被攻落馬瀬城折首二百余人ヲ
補百練抄云十二月二日東国追討使
左兵衛督知盛已下発向云々
奈良炎上の事

太政の別当事
補有官別当十リ拾数抄云勧学院
依長者宣以氏辯為別当又有六位有
官無官別当
きつちやう乃事
補抄十リ古ヘ五月五日武徳殿ニノ
抄越ヲ命ゼラル西宮抄ニ出タリ按
九ニ騎乘ニノ越ヲ抄十リ今マ正月
二小児ノ玉ヲ弄スル其遺法十リ
至まくの出たりんひ云々
補本朝文粋三善清行意見云諸国

検非違使掌紀境内之逝盜禁民間
之凶邪云々國中追補及断罪二向委
此検非違使云々
大弐軍ヨハ所中弐郷中宮亮通盛於合戦
物四百餘騎なんと云々
治承四年十二月廿五日山槐記云依討南
都山嶺衆人所重郷胡民卒数千軍兵殺
向今夜宿字佐云々○廿六日記云天時雨
雪隆後少悪郷胡民今日逼百字佐依
西宮不敢向云々○廿七日記云隆少南
都廻討使宗郷於民宿物光陳所渡田之

人民於大夫成良軍兵向泉木津辺一陣与
衆徒合戦矣故一方依日暮又戦○廿八日
記云未刻南方有怪若是官兵放火南
都欲入夜彼有火光聞巷云官兵於泉木
付合戦攻渡河南衆徒放火左家又云官
兵自河内国越来曽地々間辺衆徒被攻
寄犯点甚多乱南都兵勢威云々後少官兵
焼木津於京良坂合戦良久不能逐又彼
攻敗給興福寺合戦彼不禦俗衆徒皆退
散官兵放火所々左家丈間東大寺東福
寺辺所々焼燼云々官兵所々放火衆徒所々放

不分明此事正月一日不風雪京中也其
間子細相近元日暦ニ時東大寺別當法
勢大僧正禎喜仁和寺奥福寺別當権僧
正定豫七日四日依腹病入滅権別当権
少僧都義俊七秋比入滅南京南圓〻院
〻氏院別当右中弁兼定朝臣〻後日宿
曜師大威儀師孫賀不遑〻堂舎焼亡祀
日治承四年十二月廿八日為官兵被焼失
所〻

合

奥福寺内　堂世八宇　塔三基

金堂　講堂　東金堂　西金堂　南円堂
北円堂　佛堂　鐘楼　經蔵　寶蔵　四面廻廊　三面僧房
南大門　中門　中宮御各　観自在院　東円堂
一末院　唐院　松陽院　東北院　傳法院
北院　観禅院　西院　五大院　四城院
塔院堂　大素院　塔一　發志院　中院
新院　二階堂　北成檀堂上舎　醤殿
後南院　勅使房　小政所　松室
東院　大陽屋　南成壇　狩法院　庇嚴院
一言王宮　妙見　北院二所　五逆房

大窪　小戒壇　布留明神旅所　竈殿

以上九所神社此外僧房不知数沙汰寺堂少

〻ちゝ

同寺外

花厳院　花林院　相應院　已上堂

上乗院　金剛院　隨心院　安養院

竹林院　灌頂院　西小院　淨土院

玄林院　聖教院　多門院　法所

真言院　宿院　孝養院　木殿

法雲院　教王院　運之院　千理院

院法塔　春日法塔　佐保殿　利原

菩提院内

本堂　惠心院　淨土院　菩提院

四明院堂如院　弥勒院　黄菌

龍花院内

元真寺遍

玉花院

東大寺内

大佛殿　講堂　食堂　四方廻廊

三面僧房戒壇　無勝院　安楽院

真言院　菩提堂　東南院

八幡宮　氣比　氣多

已上三ヶ寺両院内外堂舎僧房左家不知
散焼失了仏像一切不奉取出之是依恐怠
兵乱

所残

興福寺内小房二宇

東大寺内堂舎々々寝殿僧房々々龍花院内本
堂已下堂舎々々僧房左家三分二

新薬師寺鎮守堂并僧房在家

授定院内 堂塔僧房

野田道 僧房左家々々

已上是去許取焼残也

於春日神社宮兵一切不入来之

後守興福寺金堂私迦屑間銀尺迦小像自灰中
求出其像廿解不見云々
後日或僧侶書写此起請

東大寺

封五千戸 東西寺二千戸 聖武大良可為致罪依因寺僧此分尽之
三百戸新薬師寺

水田壹万町

以前梓上仲物遠限日月窮未来際致細彼之
寶分依此類爰邪太上天皇御願勝満諸仏擁
護法菩重質万病消除寿命延長一切願皆
使備足令法久住拔済群生天下大地人民皆
示法界有情共成道次代々国王為我等檀越

若我等與復天下與復我寺衰幣天下衰幣
復誓其後代有不道至邪賊之人若犯若破
障而不行者是人必得破辱十方三世法佛一
切賢聖衆羅漢大地獄無數劫中永
無出離後十方一切法天梵王帝釋四天文
王天龍八部金剛密跡護法諸大善神王及
善天卒士出有大威力天神他祇七廣尊靈等
依命立切大將軍衆靈等共起大禍永滅子
孫若不犯制敬慕行者世世黒佐陸子孫繁
昌陸地昇登覺岸

天平感寶元年閏五月廿日

奉勅　正一位行大臣大宰帥橘宿禰法兄
右大臣従二位藤原朝臣豊成

勅　藏俊云神義云云
誠仁有霊延直之変　大僧都法師行信

同廿九日記云聞巷云南部衆甚強宿兵猶
申加勢云云後伝此事拯僻事之追討使
藤人所重衡朝臣帰条凶徒首四十五持条
付京畿力元指法師一人搦取持条云云

補公卿補任ヲ考ルニ通盛治承三年
十月兼中宮亮十一月更任越前守云々
然レハ是時越前守十九ハ云

形ー甲

補五條ノ袈裟ト云　袈裟ヲ以テ頭ヲ裹ムヲ甲

ふくれの庄ヒけー

補莊園ノ役使ニ給ヒ置ク者ナリ惣

検校別當寄人等ノ目アリ朝野群載

等考ベシ

焦熟大焦熟ホ

補地獄ノ名ナリ三界義往生要集等

考ベシ

仏法さいたよりたちやりたさう

補水鏡云敏達天皇八年ヒナー十月ヨ

彩雲ス　釈迦佛ヲ[illegible]

[illegible]

東金堂ヨリ[illegible]ハ[illegible]の佛あり云々

[illegible]の初世者

補盛衰記ヲ考ルニ傳法院ノ修圓

僧都ト云僧須賀多ノ池ノ邊ノ田中

ヨリ涌出セル十一面ノ像ヲ奉持シテ

安置スト云々

常在不滅

補常在靈鷲山法華經ニ出ツ又涅槃

経ニ如来常住無有変易

寶報寂光

補天台宗ニ云所ノ四土ノ目ナリ四教儀

等考ベシ

烏瑟

補名義集云烏瑟膩沙此云佛頂

白毫

補三十二相ノ一ナリ法數等書考ベシ

満月ノ尊容

補面輪満月八十種好ノ一ナリ法數等

考ベシ

八万四千のさゝか〻

補観無量壽経ニ出タリ

四十一地のゐらゝ〻

補梵網経ニ出タリ

十恵

補法數等考ベシ

法相

補彌勒菩薩ヲ祖トス解深密等ノ経

ニ依ル

三ろん

補文殊菩薩ヲ祖トス中論百論十二門

論ニ依ル

うてん大王ノ故事佛國記等ニ出タリ

補優填模佛ノ故事佛國記等ニ出タリ

又名義集優填此言出受昆首鞞磨此

言種々工業闍浮提此言勝金

補梵王帝釋ヲ云

龍神八部

補法華等經ニ出タリ

冥官冥衆

補十王經ニ出タリ